



Data

監督：監督・脚本：荒井晴彦
 原作：白石一文『火口のふたり』（河出文庫刊）
 出演：柄本 佑／瀧内公美

👁️👁️ みどころ

『戦争と一人の女』（12年）や『この国の空』（15年）での荒井晴彦は、真正面から戦争を見据えていたが、彼のもう1つのテーマは性。そのため、彼が監督・脚本する第三弾に選んだのは、直木賞作家・白石一文の原作だ。

登場人物を賢治（柄本佑）と直子（瀧内公美）だけに絞り、約2時間にわたって展開する本作のテーマは、「身体の言い分」だが、それって一体ナニ？

いとこ同士の結婚は民法上OKだが、別れてしまった2人が再会したのは、直子の結婚式に出席するため賢治が故郷・秋田に帰省した時。そこで、“あるアルバム”を見せられ、「今夜だけあの頃に戻ってみたい？」と誘われると、男は・・・

『彼女の人生は間違いじゃない』（17年）で見事な脱ぎっぷりとあえぎっぷりを見せた瀧内公美が、本作では更に過激に！また、柄本佑の堂々の裸の熱演にも感心だが、ここまで相性の良さを見せると、2008年に共に第92回キネマ旬報の主演賞を受賞した妻・安藤サクラの心配も・・・？



■□■荒井晴彦の脚本・監督第3弾は白石一文の原作に！■□■

1947年生まれ荒井晴彦は、井上淳一監督の『戦争と一人の女』（12年）（『シネマ30』199頁）の脚本家として有名なら、『この国の空』（15年）（『シネマ36』26頁）の脚本を書き、監督としても有名。そんな荒井晴彦氏が監督・脚本する映画の第3弾として目をつけたのが、直木賞作家・白石一文の原作『火口のふたり』だ。『火口のふたり』とは何とも意味シンなタイトルだが、その意味はあなた自身の目でしっかりと。

荒井氏は、男と女のエロティシズムを表現する脚本家として有名だが、原作も本作も「世界が終わるとき、誰と何をして過ごすか？」の問いに対する答えをトコトン追求したもの。そして、そのキーワードは「身体の言い分」だが、それって一体ナニ？そしてまた、男にとっての「身体の言い分」とは？女にとっての「身体の言い分」とは？

本作でそれを表現するのは、永原賢治役の柄本佑と、佐藤直子役の瀧内公美。本作は柄本佑の父・柄本明の声だけの出演が少しあるものの、全編を通じて2人だけのセックスと会話と食事だけでシーン構成された大胆なもの。しかして、約2時間にわたってスクリーン上で展開される2人だけの「身体の言い分」をめぐる演技は如何に？そしてまた、荒井晴彦脚本の出来ばえと、荒井晴彦監督の演出の冴えは如何に？

■□■この女優に注目！脱ぎっぷり、あえぎがさらに過激に！■□■

私が「近時、大変身！」として注目している女優は、第1に門脇麦。三浦大輔監督の『愛の渦』(14年)での彼女の脱ぎっぷりとあえぎっぷりはお見事だった(『シネマ32』未掲載)。それに続く第2の注目女優は、『彼女の人生は間違いじゃない』(17年)の瀧内公美。同作の評論では、「この女優はグッド！演技にも、脱ぎっぷりにも注目！」の見出しで彼女を絶賛し、「本作では、『愛の渦』と同じレベルの過激なセックスシーンはないが、みゆきのデリヘル嬢としての奮闘ぶりに注目！」と書いた(『シネマ40』272頁)。そんな女優・瀧内公美が、本作では『愛の渦』の門脇麦に勝るとも劣らない、前作より過激になった脱ぎっぷり、あえぎっぷりを見せてくれるので、本作では何よりもそれに注目！

本作は、東京で一人暮らしをしている永原賢治(柄本佑)が暇そうに釣り糸を垂らしているところに、秋田の父親からいとこである佐藤直子(瀧内公美)の結婚式を伝える電話が入るところから始まる。そこで、結婚式への出席を兼ねて久しぶりに帰省した賢治の家を訪れた直子は、賢治との再会を喜びつつ、大型TVの購入に便利屋として賢治をこき使っていたが、直子の実家で賢治が一休みをしている間に、直子を取り出してきたものは・・・？

昔のようにカメラや、それで撮影した写真1枚1枚の貴重さがなくなってしまった昨今では、「アルバム」もあまり見かけなくなったが、そこで直子を取り出した1冊のアルバムは一糸まともぬ2人のセックスを赤裸々に写したものだから、ビックリ。なぜ、直子はこんなものを今なお大切に保存していたの？そしてまた、防大出のエリート佐官だという少しおじさん(?)の自衛隊員との結婚式を間近に控えた今、なぜそれを賢治に見せるの・・・？

その時はそんな驚きだけで終わったが、その翌日500万円で購入したという新居に大型TVを搬入した後賢治がリラックスしていると、直子はソファの隣を指さして、「ここに座ったら・・・」と。そこで賢治は、「俺、帰るわ」と言ったのだが、意外にも直子は何度も激しくソファを叩き、その挙句に・・・。

■□■柄本佑も堂々の裸の熱演を！すると、いらざる心配は？■□■

2018年第9回キネマ旬報ベスト・テンと個人賞は、主演女優賞を安藤サクラが、主演男優賞を柄本佑が受賞した。奥田瑛二と安藤和津の娘である安藤サクラは、『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）での演技が評価されての3度目の受賞だが、同賞を初めて受賞した、柄本明と角替和枝の息子である柄本佑とは夫婦だから、夫婦そろっての主演賞の受賞は快挙だ。キネマ旬報2月下旬号は、そんな安藤サクラと、『きみの鳥はうたえる』（18年）（『シネマ42』28頁）、『素敵なダイナマイトスキャンダル』（18年）（『シネマ41』88頁）、『ポルトの恋人たち 時の記憶』（18年）の3作で同賞を受賞した柄本佑のインタビューを、54ページから57ページにわたって特集している。

私は、柄本佑が初出演した『美しい夏キリシマ』（03年）や『17歳の風景 少年は何を見たのか』（05年）以来ずっと彼に注目してきたが、その達者な演技は若手の中では際立っている。2000年に岡山県で起きた17歳の少年が母親をバットで殴り殺したという事件にヒントを得た若松孝二監督の『17歳の風景 少年は何を見たのか』（05年）は、「あんたはいつも遠くから見ているだけだ」と富士山を仰ぎ見ながら呟く少年が、ただひたすら自転車をこいで北へ向かうだけのストーリーで、メチャ難解だったが、柄本佑少年は見事にその難役を演じていた（『シネマ8』300頁）。『アルキメデスの大戦』（19年）では主役を菅田将暉に譲り、自分は引き立て役に徹していたが、本作では、ところどころに秋田弁を交えながら、全編を通じて文字通り“裸の演技”を熱演している。

「阿部定事件」で有名な阿部定の情夫・石田吉蔵は、連夜のセックスでお疲れ気味になっていたようだが、ロクな仕事にもついていないプータローの賢治は、直子からの「お誘い」で忘れてしまっていたセックスの味に火がつくと、5日間もあそこが腫れ上がるほど猛ハッスルしているからすごい。本作を2時間も見ていると、瀧内公美とのセックスの相性も抜群のようだ。しかも、本作ラストでは、5日間限定の約束だったにもかかわらず、直子側の「事情の変更」によって、2人のセックス漬けの日々がこれからも半永久的に続くことになりそうだ。すると、ヤバイのは、実生活で妻として柄本を支えている安藤サクラでは・・・？

そんないらざる心配をせざるを得ないほど、本作では柄本佑の“裸の熱演”と、瀧内公美とのセックス、セックス、またセックスが繰り返されるので、それをタププリ堪能したい。

■□■賢治はなぜ離婚？直子はなぜ結婚？■□■

帰省している賢治の家を訪ねた直子が、勝手に賢治の布団をたたみ、おばちゃん（つまり賢治の亡くなった母親）の仏壇に線香をあげている姿や、何でも自由に話している親しげな雰囲気を見ていると、この2人は子供の頃からずっと仲が良かったことが見えてくる。

本作は、セックスシーン以外にも2人の会話シーンに注目だが、それを聞いていると、①5才違いのこの2人は、東京で恋人のような関係にあったこと、②それに関わらず、賢治が直子をつって別の女と結婚したこと、③しかし、その結婚はちょっとした賢治の浮気を咎められて離婚となり、子供との面会交流権も放棄させられたこと、等がわかってくる。

他方、直子は賢治と別れた後、普通のOL生活を経て、今は自分でも思いがけない自衛隊のエリート幹部との結婚が決まり、それなりに喜んでいるが、2人の会話の中ではなぜ直子とその男と結婚するのかは見えてこない。しかし、賢治からのさまざまな突っ込みの中で徐々に見えてくるのは、直子の結婚は「子供を産むため」という理由らしい。それについて直子はいろいろ説明した挙句、結局は「女だから」で落ち着かせていたが、所詮この感覚は男にはわからないものだ。もちろん、ここで古風な日本流の貞操観念を持ち出せば、結婚式を間近に控えた直子が新居に昔の恋人を引きずり込み、5日間限定とはいえ、セックス三昧で過ごす姿はもってのほか。しかし、処女性の尊重などという感性がなくなってしまう戦後の日本では、結婚する男に愛などは求めず、単に子供を産むことのみを求める直子のような考えが成り立つのかもしれない。しかも、直子の説明によれば、それは一人娘である自分の義務であるとも考えているようだから、何とも興味深い。

前述したように、本作のテーマは「身体の言い分」。それをそのまま「性欲」と言ってしまうえば身も蓋もないが、「身体の言い分」は男だけでなく女にもあるものだ。本作にみる5日間限りのセックス三昧の生活は、直子が賢治にかけた「今夜だけ、あの頃に戻ってみたい？」の言葉から始まったが、直子はなぜあの時、あのシチュエーションで、そんな言葉を？ひょっとしてこれはすべて、直子が帰省中の賢治の家を訪れた時からの周到な戦略・・・？

■身内から特定秘密保護法の違反行為が？その結末は？■

私は富士山の火口を見たことはない。しかし、阿蘇山の火口を見学したときの経験によると、そこを2人だけでロマンチックな気持ちで見つめていけば、2人でその火口の中に入っていこうという誘惑に駆られても不思議はない。それは、華厳の滝のような美しい姿を見てもきっと同じだろう。賢治と直子の2人には、そんな貴重な体験（思い出？）があったらいい。しかも、賢治が直子をつった後、賢治はそれを完全に忘れていたが、直子の方は富士山の火口を写した大きなポスターをずっとベッドの横の壁に貼っていたほどだから、一日としてそれを忘れた日はないらしい。そのうえ、「あのアルバム」をずっと大切に保存していたのだから、直子の「火口のふたり」に対する思い入れは相当なものだ。しかし、本作後半からは、その富士山の火口を巡って直子の夫となるべき自衛隊のエリート“ある任務”が語られていくので、それに注目！

ちなみに、政治に無関心の直子は全く知らなかったものの、賢治の方はさすがに特定秘密保護法が成立したことや、それに違反した場合の罰則等は知っていたらしい。そのため、夫となる男から「重大な任務のため」というだけの理由で一方向的に結婚式の延期を告げら

れた直子がとった行動に対して、賢治は「それは特定秘密保護法違反だ」と半分茶化しながら批判していたが、結婚式の延期という宣告を受けて直子（の気持ち）はどう動いたの？ ましてや、その中で「世界が終わるとき誰と何をして過ごすのか？」という大きなテーマを設定されると、その答えは・・・？本作の結末に向けての動きは私にはイマイチ納得感がないが、さて、あなたは・・・？

賢治の母親は亡くなる前に直子に対して、「お前たちが結婚してくれれば良かったのに・・・」と語っていたそうだが、それはたしかだ。日本の民法でもいところ同士の結婚はOKだから、もし2人の意思が合致すれば今からでもそれは可能。もちろん、そうになると毎日「身体の言い分」ばかりに従う生活ではなくなるが、さて、この2人は本作ラストの局面でいかなる選択を・・・？

2019（令和元）年8月29日記